

第 126 話<大切坑出水>の要約と参考資料

第 126 話<大切坑出水>の要約と参考資料

江戸時代に外録銀山を開発し大富豪になった守田三弥は、刑場にのぼるとき「他人が一鍬入れれば 100 石の水をだして山をつぶす」と遺言した。350 年後、亜ヒ焼きが再開された鉾山で、出水事故が起こって採掘不能に。資金援助して再建に協力したのが住友金属鉾山だった。

第 126 話<大切坑出水>の要約と参考資料

1 2 6 - 1 三弥が最後に残した言葉

小宮新八氏の備忘録より

三弥は殺されんとする際に、此の山は実に素晴らしい鉾山であるが、採掘については坑内出水が非常に多く、たとへ他人が掘っても成功は期し難く、又、自分は殺されても他人には掘らせない。若し他人が一鍬入れれば 100 石の水を出して山をつぶしてしまふと云うて殺されたと云ふ。

1 2 6 - 2 佐藤数夫が書いた呪いの手紙

土呂久鉾害損害賠償請求事件 第二準備書面（1976 年 12 月 6 日）より

佐藤数夫 経歴

昭和 2 年に岩戸尋常高等小学校高等科 1 年終了後、高千穂町岩戸土呂久、佐藤茂（数夫の実姉サミの夫）方に居住し、右茂の農業の手伝いを始めた。その後昭和 11 年から同 15 年までの間、右の住所から約 500 メートル南方に茂の家族とともに転居した。昭和 6 年 18 歳のときから鉾山に臨時工として勤務するようになり、昭和 17 年に召集を受け兵役につくまで、主として農閑期である毎年 10 月から翌年 5 月までの間、亜砒焼殻の運搬、片付け作業に従事した。（略）昭和 28 年 4 月頃の鉾山に本工として採用され、採鉾夫として坑内作業に従事した。昭和 31 年に鉾夫の集団検診により急性気管支炎の診断を受け、排水ポンプ係の軽作業に配転を受け、昭和 33 年 7 月頃まで勤めた。昭和 33 年 7 月に鉾山をやめて後は、再び妻の実家の農作業の手伝いに従事するようになり現在に至っている。

土呂久鉾山労働者名簿（昭和 47 年 2 月 15 日、土呂久・松尾等鉾害の被害者を守る会作成）

176 佐藤数夫 生年月日：大正 3 年 6 月 29 日

入社年月日：昭和 28 年 11 月 1 日、退社年月日：昭和 33 年 7 月 31 日

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P217～P220

姉さんが嫁入りした「向土呂久」へ、数夫さんが奉公に出たのは昭和3年のこと。毒煙の中で暮した数夫さんの目は、18歳のころにはすっかり悪うなったおった。えらい白ズボンのはやった時代での。「向土呂久」から50間ほど離れた道を白ズボンの人が登っちいく。どうしたわけか、その姿が二重に見ゆるんじゃ。延岡の眼科で診てもらたが、原因不明とされて治らざった。昭和9年の徴兵検査で、目が悪いために第二補充兵。それでも昭和17年11月に召集令状がきた。「母屋」のハナエさんと結婚して7カ月目のこと。都城の歩兵連隊に1週間おって、満州へ送られた。(略。シベリア抑留を終えて)高砂丸で舞鶴に着いたんは、昭和23年6月24日。衣服と2千なんぼの金が渡った。(略)故郷に帰った数夫さんの身体は、すっかり弱ってしもとる。亜砒にやられた気管は、シベリア生活がこたえたのか、特に悪化しておった。

向土呂久の家移り

佐藤数夫さんの話(1978年1月28日聴取)

「とくぜ」(向土呂久から約500メートル南)に母屋の畑があった。茂の姉が「母屋」の一蔵の妻という関係。(昭和15年に)かなりの人数で引っ越した。家族ぐるみ、牛も引いちゃった。草は「母屋」の「青毛」を借りて刈りよった。煙はこんようになったが、同じ水を飲んでた。米もできるだけ作りよった。畑はトモロコシだけ。陸稲をちいと作ったが、できんかった。

1979年6月28日毎日新聞記事

土呂久の公害病患者 / ヒ素で喉頭ガン / 宮崎病院医師団が確認

砒素が原因で喉頭ガンが発生した——宮崎県土呂久鉦山の慢性砒素中毒症の認定患者の中に喉頭ガンにかかっている患者のいることが同県立宮崎病院耳鼻咽喉科の医師団によって確認された。(略)この患者は宮崎県西臼杵郡のAさん(64)。土呂久鉦山の焙焼炉の近くに永年住み、鉦山作業の従事歴が約8年ある。4年前、手足の皮膚症状、手または足の軽度の運動障害から慢性砒素中毒症による疾患と認定された。その後、Aさんは声がかれたのに気付く同病院耳鼻咽喉科(大野政一医師ら)を訪れた。同科で診察した結果、しゅようが認められたが、このしゅようについて同病院は①Aさんは長期間、砒素の粉じんをかぶって生活した②Aさんの喫煙量は極めて少なく喫煙の影響はまずない③しゅようの部位が声門上部にある一などの理由から喉頭ガンと断定した。

川原一之著「浄土むら土呂久」(筑摩書房、1988年9月)P189~190より

戦後も、古祖母にいだかれた谷間のむらを、毒の煙が這うことになった。再びむらに危機が訪れた。

「煙害デ死ヌメニオウテ困ッテオル。亜砒焼キヲヤメヨ。ヤメヌナラ、ウチニアル府内山

弥ノ位牌ヲ紙ニ包ンデ、川ノ底ニ沈メテヤル。ソノタタリデ鉱山ニ水ガ出テ、採掘ガ出来ヌヨウニナルデアロウ」

土呂久鉱山を経営する中島鉱山の社長へ、差出人不明の手紙が投函された。土呂久鉱山を開いたとされる山弥の位牌は、だれも持ってはいない。それなのにこんな呪いの文句で操業をやめさせることしか、当時のむら人は思いつかなかったのである。筆跡をくらすため左手で書いた文字は震え乱れて、差出人がばれたときの仕返しに怯えているかのようだった。

なんということか、それから半年後の1958年（昭和33）7月、掘削中の大切坑の地下110メートルで水脈をぶちぬき、どっどどどと水が湧きだしたのである。みるみるうちに坑道は水没、鉱山は休山に追いこまれた。呪いの手紙が現実になった。

126-3 昭和30年7月の湧水

土呂久公害史年表より

1955（昭和30）年7月23日 西斜坑掘り下がりより湧水

根本亨「会社季刊誌の発刊を祝す」（中島鉱山季刊誌創刊号、昭和31年4月30日発行）

昭和29年1月27日、下3番坑で待望の鉛垂鉛鉱体に着脈するに至ってから、社運は漸次発展の方向に進み、昨年7月23日、西斜坑下りより不時の大湧水事件があったにもかかわらず、着々坑内外の機械化をととのえ、生産量倍産（月精鉱800吨）の態勢となり、既に数年来の懸案たりし、砒鉱連続焙焼炉も、昨年3月末より操業に入っており、又、ディーゼル自家発電も、本年になって整備全く完了し、最早本年の台風時には、保安用電力は勿論、社宅電灯も灯り、ラジオ情報も分り、的確なる判断のもとに、台風に対処する事が出来る事になりました。

126-4 昭和32年4月の湧水

土呂久公害史年表より

1957（昭和32）年4月12日

第二斜坑掘り下がり坑道9Lより下65.8mで15m³/分の湧水

1958（昭和33）年2月

前年4月湧水の排水がうまくいく。13L上の鉛・垂鉛鉱、9L上のヒ鉱を採掘し始める。

126-5 昭和32年8月26日（新聞不明）

出水激しく減産続く / 青息吐息の土呂久鉱業所

西臼杵郡高千穂町土呂久鉱業所（中島鉱業）で4月から坑内の出水が激しく、ついに生産半減になり、同社では復旧対策に懸命になっている。

土呂久鉱山は“夢買い長者”で有名な肥後の住人守田山弥が400年昔に開鉱したと伝えられる日本では足尾銅山とともに古い鉱山で鉛、銀、ヒ鉱石を産出、その含有量は日本で特殊な鉱山となっているところが、4月12日鉱内の156メートルの斜坑道を掘進中に大きな水脈に当たり、またたく間に水がふえて9番坑まで上昇し、坑内に設備してあったサンドポンプ5台が水びたしになり、排水工事ができなくなった。

そのうえ台風7号で送電線が切れたため水は4番坑道までつかり、現在では3番坑がようやく助かっている状態である。

このため鉛鉱石500トン、銀、ヒ鉱石200トン計700トン（700万円）の月産量が4月300トンに減ったのをはじめ次第に減産になり、3月から8月25日までの減産量は合計1240トンに達し、金額にして1240万円の欠損を生じている。事態を心配した木立同鉱業所長ら幹部は26日上京、本社に事情を説明するとともに通産省にも対策を要請することになった。

なお復旧には50、30馬力の排水用モーターを新設しなければならず、また水没した12台のモーター修理などで完全復旧、操業までには少なくとも3か月を要する見込み。

昭和32年中島鉱山株式会社営業報告書

4月中旬第2斜坑掘下坑道9Lより、下65.8mの箇所にて、当時15立方メートル/毎分の湧水が起り、一時3L下迄水没した為、排水並に水止作業に多くの日数を要し、又、8月19日の7号台風の来襲を受ける等、生産に著しい支障を来たしました為、鉛・亜鉛鉱に於ては前期に比して約200トンの減産となりました。然し乍ら砒鉱生産は、市況の悪化需要減により前期に比し1,500トンの減産となりました。当期は9L上部の各鍾押等を主として探鉱し、これに第二斜坑掘下り10L、11L等からの出鉱も加えられました。又、亜砒酸は砒鉱の採掘量が少ないため、従って、製錬用塊鉱も少量となり、主として団鉱を製錬しましたが、実収率が悪く、生産量については、所期の成果をあげ得られませんでした。

126-6 昭和33年7月の湧水

1958（昭和33）年7月11日

砒鉱体掘進中、11L（地下110メートル）より1.5~2 m³/分の湧水

7月13日

0Lまで完全に水没（大切坑道に達し、全坑内が水びたし）

7月20日

「昨年4月から出水に悩んでいた土呂久鉱山はついに12日閉山を宣言。21日から会社側と労組側（小笠原武委員長）が退職後の問題について話し合いを始めた」（7月22日

付け日向日新聞)

7月22日

日向日新聞に「土呂久鉱山閉鎖 / 出水に悩まされて」の記事載る。

朝日新聞に「廃鉱休山に決る / 中島産業土呂久鉱業所」

7月24日

日向日新聞に「土呂久鉱山 / 400年の伝統を断つ / 滝のような湧水 / 行く先まっくらの従業員」の記事載る

9月30日

中島系役員、鈴木仙だけ残して辞任。

126-7 朝日新聞記事(昭和33年7月22日)

廃鉱休山に決る / 中島産業土呂久鉱業所

西臼杵郡高千穂町岩戸の中島産業土呂久鉱業所が20日廃鉱休山することになった。

これはさる4日から第2斜坑の11番坑を掘進していたところ11日午後8時半水脈にぶつかり毎分1.7から2立方メートルの水が噴き出し、11番坑から14番坑まで坑内を水びたしにした。わき水は二昼夜で満水となり排水不能になった。鈴木社長は19日東京から来山、現地で重役会を開き資金難による休山を決定し、20日には作業員90人、事務員17人の全従業員に解雇通知を出した。

同鉱山労組では、会社の措置を全面的に受入れている。

126-8 宮崎日日新聞記事(昭和33年7月22日)

*第89話と重複

土呂久鉱山閉鎖 出水に悩まされて

昨年4月から出水に悩んでいた西臼杵郡高千穂町土呂久鉱山(所長木立利雄氏、中島鉱山=本社東京都新宿区、社長鈴木仙氏)はついに20日閉山を宣告、21日から会社側と労組側代表(小笠原武委員長)が退職後の問題について話し合いをはじめた。

(略)さる11日朝、地下110メートルの11番坑内で毎分1.5-2リューベの出水をはじめ13日にはついに大切坑道に達し、全坑内が水びたしになってしまった。

19日鈴木社長、永見木浦所長、糸井本社経理部長、木立土呂久鉱業所長の4重役が現地に集り実地調査の結果、昨年4月にも地下135メートルの13番坑から出水して3番坑まで水びたしになり、排水に6カ月間かかっており、今度の出水は現在のところ数千万円をかけても復旧できないとの見通しで閉山を決めた。

126-9 宮崎日日新聞記事(昭和33年7月24日)

*第89話と重複

土呂久鉱山 四百年の伝統を断つ 滝のような湧水 行先まっくらの従業員

400年の伝統を持つ西臼杵郡高千穂町土呂久鉱山＝本社東京都新宿区中島鉱山＝が昨年4月からの出水による全坑内の水浸しで、さる24日、とうとう閉山を宣告した。年間1万トンのスズを生産する有名鉱山だっただけに惜しまれ、一方では職を失った従業員150人（うち60人は木浦選鉱所）のこれからの生活をどうするかが大きな問題になり山は暗い表情に包まれている。

（略）高千穂町岩戸地区から岩戸川支流に沿って6キロ、古祖母山の山ろく（1633メートル）にあたる標高512メートルの地点にある。（略）鉱区面積152万2528坪から鉛、亜鉛、ヒ素などを月に800トン生産し年間1千万円をかせいでいた。

昨年4月12日、13番横道をさらに掘下げた地点から出水があっただけに、その後は細心の注意を払いながら削岩機を入れ、出水の有無をたしかめた上ダイナマイトは使用せずコールピックという部分だけをかきとる方法で掘進していた。

ところがさる11日、地下110メートルの11番横道で水脈にぶつかりドッと水がふき出した。水はまたたく間にふえ13日までに10、12、13番坑が水浸しになり、あふれた水は坑内入口から滝のようになって流れ出しているのである。全く手のつけられぬ状態である。仕事の都合で入坑していなかったのが不幸中の幸いだった。

しかし坑内に排水のため置いていた50馬力高圧、低圧各1台、低圧30馬力2台、15馬力4台、10馬力2台、5馬力1台、9馬力サンドポンプ7台が急激の浸水のため3台しか搬出できなかった。この被害は300万円に上り、その他電線、送水管など含めると400万円に上ると鉱業所は言っている。

126-10 住友金属鉱山による再建

土呂久公害史年表より

1958（昭和33）年10月24日

住友系役員が中島鉱山を牛耳る。所長に永見龍輔。